Japanese Association for Religious Studies

第三部会

エルンスト・トレルチと保守革命

小柳敦史

本発表では保守革命論の代表者と目されるO・シュペングラーの『西洋の没落』に対するE・トレルチの議論をてがかりとして、第一次大戦後のドイツ思想界に広まった保守革命的言説と、トレルチの歴史主義理論の相違を明確化することを試みた。具体的には『西洋の没落』第一巻と第二巻それぞれに対するトレルチの書評、およびトレルチの著書『歴史主義とその諸問題』におけるシュペングラーへの言及の内容を確認した上で、『歴史主義とその諸問題』と関連する二つの論文からトレルチ自身の立場を、保守革命的言説を参照点としながら明らかにした。

『西洋の没落』は一九一八年に第一巻、一九二二年に第二巻が出版され、トレルチはそれぞれに対して書評を寄せたが、二つの書評の間では論点に違いが見られた。端的に言って、第一巻への書評は、シュペングラーが当時の「学問における革命」の一部として、歴史叙述におけるディレッタンティズムを体現していることの長所と短所が指摘されていた。それに対し、第二巻への書評では、シュペングラーの著作の持つ政治的含意に目が向けられているのである。すなわち、シュペングラーにおいて「学問における革命」が、ヴァイマール共和国の民主主義に対する保守革命と一体となっていることへの警戒心があらわになるのである。

こうした変化があるという事実は、たとえば佐藤真一によって指摘されていた。しかし本発表において注目したのは、『西洋の没落』第二巻に保守革命的言説が見いだされることは、単に時代状況の推移という外的要因によるものだけではないというトレルチの分析である。それによれば、ディレッタント的な歴史の取り扱いには、保守革命的言説へと向かいうる、内的な要因があると理解されるのである。

トレルチは論文「歴史主義の危機」において、厳密さや客観性に拘泥することなく「総合」に従事するディレッタントの代表例としてシュペングラーを挙げる。トレルチはディレッタント的な歴史の乱用が、歴史の中の特定の要素の強調に結びつく危険性を感じており、それを「歴史主義の危機」に対する正しい克服手段だと認めることはできなかった。

歴史的思考は特定の個別的な歴史とそこに根拠を持つ排他的な共同体形成に向かうのではなく、多元的な共同体形成を支持するものであることが「歴史の真理の偶然性」という論文において主張されている。絶対的な真理を主張し得ない中間時に生きる歴史的存在者を、多様な歴史的諸連関の総合として理解する考え方をトレルチは「個別性の理念」と呼ぶが、その歴史的多様性は、現在的な観点から見ると人類と個人の間の中間領域における共同体の多元性として現れている。トレルチの理解では、公正な歴史的思考によって、個別的な歴史的存在者が帯び

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

る多元性が正当に捉えられるのであり、様々なレベルの共同体の意味が承認される。そうであるとするならば、厳密な歴史研究の手続きを放棄し、歴史を描くことを詩だと言い放つ態度からは恣意的な共同体理解ないし共同体形成が導かれる危険性が指摘されうるだろう。

シュペングラーの例から確認されるのは、トレルチにとって保守革命的言説の問題点とは、歴史研究におけるディレッタンティズムによって歴史の範囲がナショナルなものへと限定され、その結果として現在の歴史的存在者の存立基盤としてナショナルな共同体のみが強調される事態であった。そして保守革命的言説の流行と右翼勢力の隆盛が関連していることが理解されるにつれ、それに抗するためには、危機に瀕している歴史主義からその良きものを救い出す必要性がより差し迫った課題として感じられたのではないだろうか。

トレルチにおける〈文化史〉の概念

塩濱健児

エルンスト・トレルチは、一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけて活躍したドイツの神学者であるが、その研究は神学だけにとどまらず、宗教学、宗教哲学、歴史哲学、倫理学、宗教史、精神史、文化史、宗教社会学など広範で多岐にわたっている。そのなかで彼の〈文化史〉概念は独特の特徴をもち、彼の思想を形作る重要な一局面を担っている。本発表では、このトレルチの〈文化史〉概念を明らかにしたい。

トレルチはかなり早い段階から〈文化史〉をみずからの歴史記述の方法として打ち出しているが、この〈文化史〉は、現代において流行しているような文化史とは異なる意味を有している。また、かつて一八・一九世紀頃に用いられていた「文化史」概念とも異なる意味合いをもっている。いまでこそ文化史は何でもありの状況と化しているが、かつて「文化史」はいわゆる高尚な文化を対象とするものであった。トレルチの〈文化史〉概念は、ブルクハルトに代表されるような「文化史」に近いものではあるが、それとはまた異なる特徴を帯びている。

トレルチは種々の思想から影響を受けながらも、それらを批判的に受容して〈文化史〉概念を醸成していった。端的に言うと、トレルチの〈文化史〉的方法とは、さまざまな相互作用を把握し、複雑な「相関関係」を捉える手法であるが、大きく「歴史学的方法」と「社会学的方法」に分けて考察することができる。「歴史学的方法」は、「歴史学的批判」、「類推」、「相関関係」という三つの本質的な原理にしたがうものであり、トレルチは教会史やキリスト教の枠内だけで捉えていこうとするやりかたを独断的（dogmatisch）であると判断し、より広い視点、すなわち宗教史、〈文化史〉という枠内で捉えていこうとして、いままでなされてきた方法に問題を提起した。トレルチは学問の分野においては、一般性をもち、すべてに適用可能な「歴史学的方法」を適用することを求めた。

さらに、トレルチは「歴史学的方法」を徹底していく際に、その「相関関係」を把握する方法が一面的にならないように

NII-Electronic Library Service